

遊泳する お供え餅

小正月には「まゆだまあげ」

逆井の、ある農家から見に来るように、という電話があった。一月十四日のことである。何があるのかは言わない。昔からのしきたりを守る稲作農家である。昔から行ってみると、神棚には十二個のお供え餅が遊泳している。その昔、紅白の餅で、繭玉（まゆだま）のような格好を作り、小枝につけて飾った記憶はあるけれど、ちよつと大きいお供え餅を飾るのは初めて見た。

やりくりうまい、ということから枝はクリの木を使うという。神棚を始め、仏壇、七福神、氏神様（稲荷）、荒神様（かまどなど）、それに弁天様にお供え餅が飾られていた。
神棚には刈り取ったままの稲が、堂々と新春を寿いでいる。
さて、この餅飾りを何と言うのか。



教育委員会編集本には、「若餅・メエダマ」とあるが、お供え餅を飾ったという記載はない。

この餅飾りという風習を何と言うのか。農家に記憶はない。奥さんが餅を海苔巻きにして出してくれ、お茶を飲みながら聞いたが、分からなかった。風習は名もなきままに受け継がれてきた。
その日の午後、南部近隣センターに行き、秋谷所長に漢詩の話を聞きながら、餅飾りのことに触れたところ、ご尊父のときも同じしきたりがあったという。所長は沼南・藤ヶ谷の住人である。やはりそれを何と言ったかは分からないと言う。
豊四季の元農業委員会の会長に電話してくれて、「まゆだまあげ」だと教えられた。「繭玉あげ」ということらしい。
柏市教育委員会編集の「柏の民俗・考察編」に、「若餅・メエダマ」という項目がある。これに該当するようだが、お供え餅を使うという記載はない。メエダマは小さいから、もつとでつかいのをあげて、五穀豊穡を祈ったのだろうか。



枯山水の弁天さんにも「繭玉」を供えた